慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロバート・ バートルズ 配給論の発展に及ぼせる諸影響
Sub Title	Robert Bartles, "Influences on the development of marketing thought."
Author	片岡, 一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.2 (1952. 2) ,p.129(57)- 134(62)
JaLC DOI	10.14991/001.19520201-0057
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520201-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

間にその不足分を持廻らすにすぎないであろう。

(6)勿論不足國品と超過國品との競爭關係はなにも直接的でなくともさしつかえない。間接的な關係が存在すれば、價格調整は作用し得る、という。しかしこれらの場合でも根本的に重要な條件を除いてゐる。それは通貨の國際的振替性である。かくて彼は最後の具體的條件たる爲替管理政策下の分析を差別統制

第四表

			支拂の増減 D_1 (a)	D_2 (b)	S_1 (c)	S_2 (d)	B (e)	國民所得 増減 (f)	輸出 増減 (g)	國際收支 過不足 前 (h)	後 (i)
Case (i)											
受取の増減	D_1	(1)	−30	−1	+17	+1	0	−13	+17	−60	−18
	D_2	(2)	−12	−20	+1	+2	0	−29	−9	−40	−29
	S_1	(3)	−12	−6	+40	+4	0	+26	−14	+80	+26
	S_2	(4)	−1	−10	+16	+10	0	+15	+5	+20	+15
	B	(5)	−5	−3	+6	+3	0	+1	+1	0	+1
國内支出増減		(6)	−60	−40	+80	+20	0				
輸入の増減		(7)	−30	−20	+40	+10	0				
Case (ii)											
同上		(1)	−30	0	+25	+5	0	0	+30	−60	0
		(2)	0	−20	+15	+5	0	0	+20	−40	0
		(3)	−25	−15	+40	0	0	0	−40	+80	0
		(4)	−5	−5	0	+10	0	0	−10	+20	0
		(5)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(6)	−60	−40	+80	+20	0				
		(7)	−30	−20	+40	+10	0				
Case (iii)											
同上		(1)	−52	0	+4	+1	0	−47	+5	−60	−47
		(2)	−4	−30	0	+1	0	−33	−8	−40	−33
		(3)	−3	−3	+70	+1	0	+65	−5	+80	−65
		(4)	0	−5	+4	+16	0	+15	−1	+20	+15
		(5)	−1	−2	+2	+1	0	0	0	0	0
		(6)	−60	−40	+80	+20	0				
		(7)	−8	−10	+10	+4	0				

J. E. meade, Balance of Payment Chap. XXVI

の效果に主題しながら解述してゆくのである。(Chap. XXIX)

差別統制の現在における問題については、もはやこゝで再現するまでもあるまい。すでにフリィシュに對するボラックの論文 Balancing International Trade, A Comment on Professor Frish's Paper, J. Polak, A.E.R. March. 1948 においても檢討されたが、これが前述の如き多數國の爲替相場調整效果の分析と結びつけられた複雜な姿の描出にミードは確に成功してゐるといわなければならない。われわれは部分的に指摘したような分析の稀薄が彼の複雜なかかる描出への努力によつて充分相殺して餘りあるものであることを稱讃し、續卷への多大な期待を寄せたい。

紹介

ロバート・バートルズ

「配給論の發展に及ぼせる諸影響」

Robert Bartles, "Influences on the Development of Marketing Thought."

片岡一郎

アメリカにおいて今世紀の初頭以來特異な展開をみせた所謂

ロバート・バートルズ「配給論の發展に及ぼせる諸影響」

Marketing（配給論）の發展の跡をふりかえつてみるとき、そこに顯著な事實として先づ注目せられるのは、配給の制度的乃至技術的側面の研究が著しく進んでいるにも拘わらず、配給論の科學的基礎付けとも言うべき方法論の問題が、更にはその理論的考察の點においても不當にこれらが輕視せられ、技術と理論の間の均衡が全く失われていると言う事實である。いわば思索と形式が調査と内容の犧牲に供せられたかの觀がないでもない。勿論斯る展開を不可避的ならしめたその背後には、それに對應すべき歴史的背景なり時代的要求なりが指摘されなければならないが、それはともかく、そのような事情の下に、經濟科學の一分科としての商業學の成立が果して期待しうるであろうか。遺憾ながら今日の學界においては、依然として商業學の性格に關し、その科學性と獨立性とが疑われている實情である。それは過去における商業の經濟學的研究が不徹底であつたことの結果であろうが、さりとて斯る研究が皆無であつたと言うわけではない。わが國においても谷口氏やその他なお二三の人々によつて此の方面への積極的努力がなされたにも拘わらず、それが商業學の支配的趨勢たりえずして終つている。われわれが此の古い殼にとじこもる限り商業學が科學的に基礎づけられ、經濟學における自己の立場を十分に主張しうるに至ることはおそらく不可能であろう。古き殼からの脱皮が現在の大きな課題

として强調される所以である。

ドイツにおいてシエアをその總帥とし、ベルリン商科大學を中心に華々しい發展を見せた商業論固有の體系的研究も、經營經濟學の中に吸收されてからは、商業學研究の主流を形成し來つたものは實に配給論であつた。しかるにその配給論において、科學的基礎付けの問題が未解決のまま今日に持越され、その解決を迫りつつある此の事實は、我々の十分注目すべき點であると考える。ところが戰後のアメリカにおける配給學界の一の研究傾向として注目せらるべきことは、かかる未解決な問題への積極的解明が漸く活潑化せんとしつつあるやに感ぜられるということである。卽ち筆者が直接知りえた限りにおいても、カンサス大學アルフレッド・シーリー教授は、"The Importance of Economic Theory in Marketing Courses"なる論文を、カリフォルニア大學ジョージ・ロビンス教授は"Notions About the Origin of Trading"なる論文を、又オハイオ大學ロバート・バートルズ教授は"Can Marketing be a Science?"、更には今筆者がその紹介を試みようとする同教授の"Influences on the Development of Marketing Thought"なる論文が相次いで發表せられているのである。勿論此等の論文は夫々異つた意圖から出發し、異つた効果をねらつたものであるとは言え、從來比較的等閑視せられて來た分野への新たな試みである點では、共通的性格のものとして考えられようし、アメリカ學界の新動向を示すものとしてうけとりうるのではなかろうか。更にはベックマン教授の大著"Wholesaling"の新版の中にも、同教授が配給論の經濟學的基礎付けをひそかに志向せられていることを伺い知ることが出來るのである。斯る展開は當然過去においてなさるべくしてなされえなかつた展開である。クラーク教授の規定からも明らかな如く、配給論が社會的流通現象をその對象として成立したものである限り、社會科學としての形式と基礎を持たねばならなかつた筈である。周知の如く、オハイオ大學はウイスコンシンを除くミネソタ、イリノイ、ミシガン等の各大學に依り構成せられる「ミドルウエスターン・グループ」の中にあつて、バトラー、チエリングトン、ナイストローム、ショウ等いわば配給論の創始者により生み出されたものを「配給機能や配給原理を强調しつつ」確固たる基礎の上にこれを築き上げ、「配給論の開拓者的段階を立派に完成せる」數々の貢獻者を輩出せる大學の一つであつた。草創の配給論に學問的性格を附與し、これを一應の完成の域にもたらしたものはハーヴァードに非ず、ウイスコンシンに非ず、實にオハイオ大學を中心とするミドルウエスターン・グループであつた。その意味においてミドルウエスターン・グループの功績は高く評價せられなければならないが、今日配給論における未解決な問題の解決に向つて再び此のオハイオ大學のバートルズ教授により最初の一鍬が打下ろされたこの事實も決して偶然ではないと考える。

著者が此の論文で企てようとするところは、漸く「半世紀の歴史をもつに至つた配給論の發展のあとを回顧し、その發展に與つて力あつた影響力を見究めよう」とするにある。無論斯る影響力は多樣であり、その中には、客觀的社會事情も擧げられようし、又初期の諸學者の主觀的努力も同時に影響力の一つとして指摘されねばなるまい。が然し、著者は此處では一應「配給の最初の研究を刺戟した主觀的影響力」に限定し、「現代の配給論を形成し發展せしめた」影響力の「基本的性格の一部を明瞭ならしめんとするに過ぎない」と言う。從つてその限り、此の論文が上述の今日配給論が要求しつつある問題に何程の寄與をなしうるかについては疑問の餘地があろう。斯る要求に沿うためには、主觀的影響力と客觀的影響力とを綜合的に取り上げ、此等兩者の相交渉し合う過程として展開せられることが一層望ましいのであり、その意味ではたしかに片手落の感がないでもない。しかし今日迄アメリカにおいて極めて雜然たる姿で發展せしめられて來た配給論の研究に、ハーヴァード・グループ、ウイスコンシン・グループ、ミドルウエスターン・グループ、ニューヨーク・グループなる枠を設け、一應全體的見透しを可能ならしめ配給學說の體系化に向つてその最初の礎石が此處に與えられたことは、同時に今後此の方面における一層の發展を約束するものとして本論文も亦高く評價せらるべきものであろう。

配給問題が社會的に大きな問題として取り上げられ、配給論としての誕生を見るに至つたのは、主として「青年の經驗、學問的刺戟並びに職業上の要求」という三つの影響力の結果であつた。いわば將來配給論として實るべき種子を播いたものは、實に學校を出たばかりの青年達の配給活動に對する興味と關心であつた。そして此の青年の疑問に答えるべく教師の學問的研究が進められたのであるが、此等の教師の多くは後日配給論の教師となり、一層直接的影響を與えるに至つた經濟學・社會學・心理學の分野の人々であつた。要するに青年によつて播かれた種子は、教師の學問的研究によつて丹念に育成栽培され、最後に著述という形で收穫を見るに至るまで職業上の要求が加わつて絶えず强い刺戟を與えて行つたのである。

配給論の研究に最初の貢獻をなした人には、Edward D. Jones, Simon Litman, George M. Fisk, James E. Hagerty, の四人で、彼等は一九〇三年から一九〇五年の間に夫々ミシガン、カリフォルニア、イリノイ、及びオハイオの所謂ミドルウエスターンの各大學で配給論の講義を最初に行つた人

々であつた。しかしながら「今世紀の最初の二十年間に現われたすぐれた配給論の教師連は、決して上の四人の教師達の薫陶から生れ出たものでなかつたし、又當時配給に強い關心を持つていた學生が以上四つの大學と關係があつたと云うわけのものでもない」。當時にあつては全く獨創的な配給の研究を行つていた人々が「その進歩的經濟思想の故に有名な大學に對し關心をもつに至つたのは極めて自然なことであつたし、又事實初期の配給論の著者の大部分は遲かれ早かれ此等の學校と交渉を持つに至つた」のである。そして斯る進歩的大學の中でも最もすぐれていたのはウイスコンシン大學並びにハーヴァード大學であつた。此等の大學が今日に至るまで配給論研究の中心として強い影響力を與えて來たのはむしろ當然でもある。

今世紀初頭のウイスコンシン大學は、スコット、コモンズ、エリイ、テイラー等の進歩的學者を擁し、自由な經濟思想の殿堂としての名聲を恣にしていた。從つてジョーンズ、ハガテイ、ヒッバート、マックリン、ナイストローム、バトラー、コンヴァース、コミッシュ、ヴォーガンの如き、配給論の研究において開拓者的役割を演じた諸學者がウイスコンシン大學に心をひかれたのも當然であつた。事實これらの人々は、決して最初から配給論の研究を志してウイスコンシンの門をくぐつた人々ではなかつた。例えばヒッバートの如きは農業經濟の研究を

志していた人であつた。しかるに彼等が配給論の研究に專門化するや、たまたま官舍がメディスンの地に集中していたことから相互に影響を與え且つ受け、そこに獨特な性格の配給論を造り上げて行つた。

ウイスコンシン・グループの最大の寄與は、前人未踏の此の分野を開拓し、人間活動の此の領域をMarketing（配給）と規定し、特に農產物の協同組合配給の問題を最初に採り上げ、その後の配給論の發展に確固たる基礎を提供したことであろう。此の問題の研究並びに著述に配給なる言葉を最初に與えたのも實に此のグループをもつて嚆矢とする。

當時即ち十九世紀初頭における配給論研究の他の中心はハーヴァード大學であつた。ウイスコンシン・グループの場合においては、此處で多年の研究を續けた人々が各地でその講義を行うべくウイスコンシンを後に去つて行つたのに反し、此處ではハーヴァードで研究生活を送り、初期の配給論の發展に貢獻せる人々の大部分を永くその教授團の中にとどめたのである。此のグループの中ですぐれた人々と言えば、チエリングトン、ショウ、コープランド、トスダル、ワイドラー、メイナード、マックネア、ボーデン、ヴェイル等であつたが、中でもショウは一九一二年「市場配給の若干問題」なる論文を發表し、配給論を科學的基礎の上に展開せしめた最初の一人としての榮譽をかちえた。ハーヴァード・グループの貢獻は教授上の所謂「ケイスメッソド」を展開し、その方法に則してケイスブックの數々を發表したことにある。ハーヴァード・グループが言われるとき、ショウが論ぜられ、コープランドが擧げられるのであるが、しかしわれわれは彼等と共にデイーン・ゲイの功績をも忘れてはならない。ゲイのハーヴァードに與えた影響は極めて大なるものがありショウの論文も又ゲイの指導の結果であつたし、ハーヴァードにケィスメッソドが導入せられたのも實はゲイの主張によるものであつた。

既に述べた如く、最初に配給論の講義が行われたのは主として中西部の大學においてであつたにも拘わらず、その後此の地域の大學からは、ウイスコンシン、ハーヴァードに見られた如き配給論の發展に對する積極的貢獻は生れなかつた。此の一見逆説的事實は、配給論の初期における展開が、配給の科學的究明から生れたものではなく、經濟學一般の研究途上におけるいわば副產物として發展し來つたものであることから說明されねばならない。即ち此等中西部の各大學は前記二大學における如き「すぐれた經濟學者の結集」をもたなかつた結果、經濟學の發展にもみるべきものがなくそれだけ配給論の研究も遲れざるをえなかつた。しかしながらやがて配給に對する關心の增大につれ、特に農業地帶をその背後にもつ此等の大學が農產物配給の問題に大きな關心をもつに至つたのは極めて當然である。此のグループに屬する人々としてはウエルド、クラーク、アイヴイ、ダンカン、コンヴァース、ワイドラー、メイナード、ベックマンがあるが、彼等の功績は實に配給を機能的側面からとらえ、配給原理を確立しつつ配給論の體系化に努力したことであろう。配給論の著述の出現を相連續して押寄せる波になぞらえてこれを表現するならば、その第一波は一九一〇年を中心にウイスコンシン、ハーヴァードの開拓者達の中から生れ出たものであろうが、その第二波は、それより凡そ十年後の二〇年を中心にその前後二三年間に亘り、ミッドルウエスターン・グループから現れたものである。しかもそれらの著書の表題に「配給原理」なる言葉を多くみるのは、配給論の成長を示すものとして理解されねばならない。

最後にコロンビア及びニューヨークの兩大學を包括するニューヨーク・グループが取り上げられなければならないが、その特色は配給論の研究を制度的研究として展開せしめたことにあろう。此のグループの一人にヒューアグニューがあるが、彼は主として新聞事業に興味をもち、併せて廣告ならびに通信販賣にも關心をもち、此等に關する數々の論文を新聞紙上に發表したのであり、配給論の此の方面における貢獻者の一人としてはりその功績は高く評價せられなければならない。

以上バートルズ氏は「配給論研究の最初の五十年間の終りに當り」、四つのグループに分てそれらの各々のグループが配給論の發展に及ぼせるその影響を回顧しつつ配給論の展開の跡を本論文において辿られたのであるが、そこで明らかとなつたことの第一は、配給論の誕生が配給問題の意識的追及の結果ではなく、進歩的經濟思想の香りゆたかな環境の中で行われたと言うこと、第二には初期の研究者の研究の多くが商品別研究方法によつて行われたのであつたが、少しく後には、機能的乃至制度的研究の展開が見られ、配給論が一應の體系を確立しえたその時期も斯る機能的研究の登場と殆んど時を同じうし、著述の上からは中西部グループによつて「原理」なる言葉が一般に利用されるに至つた一九二〇年頃であつたと言うことである。その他にも此の論文は尙多くのものをわれわれに敎えるのであるが、しかしバートルズ氏が最初から本論文を主觀的影響力の追及に限定され、客觀的影響力のそれは全く取り上げられなかつたことはかえすがえすも殘念である。或るいは他日の機會にゆずられたのであるかとも考えられるが、もしそれが行われうるならば一九二〇年における以上の展開が見られるや必至である。われわれはアメリカにおける斯る新動向に十分の注意を拂うとともに、配給論の新たな展開のために嚴しい自己反省の段階に立つていることを深く認識する必要がある。

論文紹介

H・C・ダービー
『ドゥームスデイブックに現れた森』
（H. C. Darby, "Domesday Woodland." Economic History Review. Second Series, Vol. 3, No. 1, 1950. pp. 21—43.）

イングランドの景觀の歷史的變化は、主として、國土の大半を覆つていた森の漸次の伐採によつて引起されたといつてよい。四三年のローマ人の侵入以來、四世紀にわたつて、農業その他の必要から、伐採が行われたにも拘らず、ローマ人がイングランドを去る時には、なお依然として森林國としての面目を具えていた。一〇八六年のドゥームスデイブックには、この森の大部分が記載されている。

然し五世紀乃至十一世紀の間に、森の伐採は次第に進捗したらしく、その結果はこの調査簿の上に明瞭に現れている。この期間の伐採の事業は、アングロサクソン及びスカンジナヴィア人（北部及び東部に於いては）によつて行われたもので、彼等こそ今日のイングランドの景觀を形成せるものと言つてよい。かくしてこの期間の終末、ノルマン人の來住と共に、森の伐採の歷史が新しい段階に入つたことを、ドゥームスデイブックの統計は示している。

(一) ドゥームスデイブックの記載樣式

アングロサクソン及びスカンジナヴィア人の侵入による影響は、一〇八六年のドゥームスデイ調査に現れている。この調査は幾多の缺陷を有してはいるが、それが殆んどイングランド全土について行われている點に於いて、大きな意義をもつている。この調査簿は、當時の法律及び經濟事情に關する貴重な資料である許りでなく、十一世紀イングランドの地理を考える上にも、また重要な素材であることを忘れてはならない。

ドゥームスデイブックは、森について次の五つの型の記載法を以てしている。第一は何匹の豚を養うに足るだけの森という表現をしている場合。第二は森使用の代償として、地代の形で領主に捧げられる豚の數を記している場合。第三は森の長さ及び幅を記している場合。第四は森の面積を記している場合。第五はその他雜多の記載をしている場合。そして通常一つの州は、全體を通じて同一の記載法によつているが、一部分は他の記載法をも併用している場合もある。

(二) 豚の總數

森は十一世紀の經濟生活には重要な役割を演じていた。それは森のドングリと山ブナの實が豚の飼料となつたからである。ドゥームスデイブックには、「何匹の豚に對する森」という言葉が現れてくる。この場合の豚の數は數百、時には千を超えている。この樣式で森の記載されている州は、エセックス、ベッドフォードシャー、ノーフォーク等である。

(三) 地代としての豚の數

南西の諸州では、各持分について記載されている豚の數が、領主に對して、森を使用する返禮に支拂はれる年々の地代を意味している。この型の記載がなされている州は、ケント、サリー、サセックスである。

(四) 尺度による記載

大多數の州がこの方法によつている。ランカシャー、チェシャー、グロスターシャー等。但しドゥームスデイブックに現れる尺度「リーグ」なる名稱については議論のあるところであり、この他に、ファーロング、パーチ等の單位も用いられているが、果してどの程度正確に、森の長さを測定し得たかは疑問である。

(五) 面積による記載

リンカーンシャーはこの方法によつて記載されている唯一の州である。然し森が纒つておらず、散在している地方については、尺度による記載法が併用されている。

(六) 雜多の記載法

一つの州が大體或る一つの記載法によつているが、その他に別の記載法を併用していることは前に述べたが、以上の記載法